國學院大學学術情報リポジトリ

学びの場をひらく「絵本キャラバン」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 成田, 信子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001233

学びの場をひらく「絵本キャラバン」

成田　信子
Narita nobuko

キーワード：絵本読み聞かせ、表現、自主性、子どもたち、共育、地域貢献

１．はじめに

学生が子どもたちに絵本を読み聞かせる活動を始めて二年目となった。名付けて「絵本キャラバン」。キャラバン（隊商）の原義は、らくだに荷を積んで砂漠をいく一団であるが、名前に込めた意味は絵本を携えグループを組んで子どもたちのもとへ出かけていくことである。この活動が、お話を聞きたい、絵本を読んでもらいたいと願う子どもたちがいるところへ届くよう発信を続けている。学生にとっては、自分の声に耳を傾け、反応を返してくれる子どもたちと直にふれあう貴重な経験である。この活動を通して、人間開発学部の目的の一つである「共育」[1)] すなわち「地域に育てられ、地域と共に育つ」ことの実現に向かいたい。事業としては本学の学部活性化事業に二年間採択されている。

初年度（22年度）は、学生の読み聞かせに対するかまえ、土台をつくることと活動に場を提供してくれる小学校等の教育関連施設の開拓に努めた。23年度は、初年度の成果を生かして事業の継続を図りつつ、より学生の自主性を引き出す活動をめざして組織の整備を行なった。１年生９名、２年生11名、３年生６名、４年生２名（文学部からの参加）が参加登録し、毎週のミーティングで、読み聞かせの絵本選び、練習、プログラムの作成等をしている。なお教員は主に四名（髙山真琴　夏秋英房　成田信子　山西治男）[2)]が専門分野を生かしながらこの事業に参画している。

本稿では、初年度と23年度の活動概要を述べ、学生の振り返りをもとにしながら学びの場としての「絵本キャラバン」の意義を考察する。

２．22年度・23年度の活動概要

２－１　22年度の取り組み

初年度は、ワークショップ三つとたまプラーザキャンパスでのキャラバン、社会教育にかかわる施設でのキャラバン、小学校、幼稚園でのキャラバンを実施した。それらの取り組みを日常活動が支えた。以下が主な活動である。

７月７日　絵本キャラバン学生募集
７月15日　絵本キャラバン発足　（１年生13名　２年生17名）
７月28日　**ワークショップ1**「体と声」児童劇団いちょう座　かめやまゆたか先生　学生13名
８月５日　**ワークショップ2**「絵本読み聞かせ入門」市川市司書　高桑弥須子先生　学生10名
９月９日　**ワークショップ3**「英語絵本読み聞かせ入門」英語教諭　稲垣昭一先生　学生10名
10月３日　**コミュニティキャンパス　絵本キャラバン**　於たまプラーザキャンパス　学生14名

来場者数約100名（保護者を含む）

11月４日　**小平第７小学校（東京都小平市）英語絵本キャラバン**　学生4名　３年生２クラス

11月28日　**寒川神社少年館文化祭絵本キャラバン**　学生12名　来場者約150名（保護者を含む）

12月21日　**美しが丘東小学校（横浜市青葉区）昼休み絵本キャラバン**（同小学校では以下同じく昼休み）学生４名児童約100名

１月14日　**美しが丘東小学校**　学生３名　児童約30名

１月19日　**美しが丘東小学校はまっこふれあいスクール（美しが丘東小学校校舎）放課後絵本キャラバン**（同スクールでは以下同じく放課後）　学生１名児童13名

１月26日　**美しが丘東小学校はまっこふれあいスクール**　学生４名児童約10名

２月１日　**美しが丘東小学校**　学生３名　児童約60名

２月１日　**国学院幼稚園　預かり保育絵本キャラバン**（同幼稚園では以下同じく預かり保育）学生５名　園児９名

２月４日　**国学院幼稚園**　学生５名　園児約30名

２月10日　**国学院幼稚園**　学生４名　園児約30名

２月21日　**市ヶ尾小学校（横浜市青葉区）英語絵本キャラバン**　学生３名　１年生５クラス

初年度は、学生が絵本を通して自ら表現することに意欲や喜びがもてることを目標にした。そのために三つのワークショップを開催した。一つ目は、児童劇団いちょう座のかめやまゆたか先生による「体と声」のワークショップである。からだほぐしのワークに続き、朗読劇リーダーズシアターに取り組んだ。何の道具もなく、観客の方を向いたまま人物の登場から、会話、出来事までを声で演じる。学生の感想を聞くと「自分は人見知りであったが、だんだんほぐれて知らない人とも楽しくできた 」など自分自身がひらかれていく様子が語られた。

二つ目のワークショップは、市川市立小学校司書の高桑弥須子先生による読み聞かせ入門である。ここでは、物語ることは人類の叡智の起源だと根本を学んだ。また本の選び方、読み方を教えていただき、実地に体験も行った。

三つ目のワークショップは、高校の英語教諭稲葉昭一先生を講師に迎えた。英語絵本の読み聞かせを授業に取り入れ、また小学校でも英語絵本を読む活動をしている。絵本キャラバンは、日本語だけではなく、外国語の絵本を読むことも視野に入れている。稲葉先生が小学校の国語教科書にとられている「スイミー」(レオ・レオニ）を原文で読んだときの子どもたちの反応から、言葉の響きを楽しむことでよいのか、意味を教えた方がよいのかを学生に問いかけ、それぞれが考えを深めることができた。コミュニティキャンパスでは、ワークショップで考えたことを生かして絵と音で楽しむ英語絵本を選んでいた。(「GO AWAY BIG GREEN MONSTER！」Ed Emberley等）三つのワークショップは23年度も継続して開催し、学生が読み聞かせについて自ら考える貴重な機会となっている。

22年度は、教育実践総合センターの小笠原優子専門研究員の協力により、学部の立地する横浜市青葉区において絵本キャラバンを受け入れてくれる小学校をさがし、現場のニーズを探りながら現場での活動をスタートさせた。昼休みにキャラバンを実施したところ、初回に学年を問わず

100名の児童が集まり、子どもたちの期待の大きさをあらためて知ることになった。また低学年児童が特に多いことも実感としてわかった。英語絵本キャラバンを実施した学校では、外国語活動の時間の一部に組み入れていただき、絵本を大きな絵にして視覚的によくわかるようにしたり、単語カードをつくって発音しながらゲームをしたりして、教員をめざす学生にとって大きな経験になった。

２－２　23年度の取り組み

23年度は、22年度の取り組みを基盤にしながらさらに学生主体の活動にしていくこと、そして活動の場を増やし地域貢献の一端が担えるようにすることを目標とした。以下に主な活動（23年12月時点）を記す。

７月17日　**サマーフェスティバル**　（オープンキャンパスと同時開催）学生８名児童約20名　高校生７名
７月19日　23年度絵本キャラバン発足（１年生加入）
８月３日　**ワークショップ1**「体と声」児童劇団いちょう座かめやまゆたか先生　学生３名
８月４日　**ワークショップ2**「絵本読み聞かせ入門」市川市司書高桑弥須子先生　学生６名
９月９日　サマーフェスティバルのＶＴＲを見る会　学生６名
10月12日　**美しが丘東小学校　絵本キャラバン**　学生10名　児童約120名
10月19日　**美しが丘東小学校　絵本キャラバン**　学生６名　児童64名
10月17日　**国学院幼稚園**　学生２名　園児約40名
10月24日　**国学院幼稚園**　学生２名　園児約40名
10月23日　**共育フェスティバル　絵本キャラバン**　於たまプラーザキャンパス 学生13名　（２部構成／　幼稚園の部　こども69名　中高生1名　大人62名／小学生の部　こども16名　中高生1名　大人11名）
11月９日　**美しが丘東小学校**　学生４名　児童約60名
11月10日　**国学院幼稚園**　学生２名　園児約30名
11月14日　**美しが丘東小学校**　　学生４名　児童約30名
11月17日　**新石川小学校（横浜市青葉区）　朝の会絵本キャラバン**　学生４名１年生４クラス
11月21日　**美しが丘東小学校**　学生４名　児童約30名
11月24日　**ワークショップ3**「英語絵本読み聞かせ入門」英語教諭稲垣昭一先生　学生８名
11月27日　**寒川神社少年館文化祭絵本キャラバン**　学生７名来場者約200名（保護者を含む）
11月30日　**美しが丘東小学校**　学生８名　児童約30名
12月１日　**すすき野小学校（横浜市青葉区）朝の会絵本キャラバン**（以下特記しない限り同小学校では朝の会）　学生４名　１年生３クラス
12月１日　**嶮山小学校（同）　朝読書絵本キャラバン**（以下同小学校では朝読書）学生３名１年生２クラス
12月８日　**嶮山小学校**　学生３名　２年生２クラス
12月12日　**美しが丘東小学校**　学生３名　児童５名

12月15日　**すすき野小学校**　学生４名　２年生３クラス
　同　　**嶮山小学校**　学生３名　３年生２クラス
12月19日　**すすき野小学校**　学生３名　３年生３クラス
12月20日　**すすき野小学校　中休み絵本キャラバン**　学生５名　児童20名
12月21日　**美しが丘東小学校**　学生８名　児童約40名

本年度は、昨年度から実施している小学校では回数を増やしていただき、先生方から読み聞かせの場所や子どもたちの期待についてさまざまなアドバイスをいただいた。さらに青葉区を中心に受け入れてもらえる小学校を増やし､学校側のニーズに合わせて朝の会で読み聞かせを行った。すでに保護者ボランティアが朝読書の時間に読み聞かせに入っていた学校では、ボランティアと連携をとって学生が入る学年を決め、ボランティアの読み聞かせを聞いたり、学生の読み聞かせを聞いてもらったりして交流を深めることができた。ボランティアの記録のとりかたは大変参考になった。記録の一覧表から本選びや読む人の得意分野を生かすことなどを学ぶことができた。「共育」の場面が実現できた一幕であった。

学生の自主性を伸ばしていく面では、現場に出かける曜日毎にグループを組み、それぞれリーダーを決めて、練習やリハーサルを行った。教員はサポート役にまわり、リハーサルには極力参加して気づきを伝えて話し合いながら共につくっていくかたちをとった。特に絵本の社会的背景など学生が気づかない点にふれるようにした。学生からもっと力量を上げるために現場の先生に学ぶ研修をしたいとの声も出ている。

社会教育の場としては、昨年度に引き続き、寒川神社少年館の文化祭で読み聞かせブースを出し、また全体発表の機会もいただいた。少年館は35年間にわたって青少年育成事業に取り組んでいる。年に１回の文化祭で楽しい催し物がたくさんあるなかで、子どもたちに絵本を聞きにきてもらうのは実はむずかしい。学校とはちがう場で、本当に聞きたい子だけが聞きにきて、しかもつまらなければ途中でも席をたってしまう。昨年の振り返りもふまえてそれぞれが本を選び、積極的に子どもたちに声かけをした結果、どの本のときにも10名前後の子供たちの参加があった。全体発表では「だるまちゃんとてんぐちゃん」(加古里子）のペープサート劇に取り組んだ。昨年の人形劇「ブレーメンの音楽隊」は今年度のサマーフェスティバルでも再演し手応えがあった。背景の絵の描き方や演じるときの背景交替のタイミング、人形の動かし方など蓄積が生かされ、経験者が積極的に今回の提案を行った。「だるまちゃんとてんぐちゃん」はユーモアにあふれた作品だが、特に小さいだるまちゃんがてんぐちゃんの身に付けている「うちわ」や「はきもの」がうらやましくて大きいだるまどんに頼むと、だるまどんが希望をかなえようといろいろな物を出してくるのがとても楽しい。背景にそれらの物を大きく描いたところ、本番で背景に対してどよめきが出ていた。またてんぐちゃんの長い「鼻」がうらやましいのに、だるまどんが「花」をたくさんもってくる場面はリハーサルから読み方を工夫していたが、聞いている子どもの「はながちがう」というつぶやきが聞こえ、お話が伝わっていくよさを感じることができた。

寒川神社少年館　文化祭
國學院大學絵本キャラバンブース

同　全体発表「だるまちゃんとてんぐちゃん」

３．子どもたちの反応と学生の学び

２年間の取り組みを、学生の記録を一部引きながら振り返り、学びの場としての「絵本キャラバン」の意義について三点から考察する。

①絵本の内容についての気づき

―「アンナの赤いオーバー」ハリエット・ジーフェルト著　アニタ・ローベル絵　松川真弓翻訳　子どもの人数　５名（１年、６年）戦争が背景にある話なので、１年生には難しいかな？と思いましたが、真剣に聞いてくれました。オーバーと引きかえにアンナのお母さんの渡したもの（高価なもの）を見て、「えー！そんな高いのあげちゃうのー？」という反応から、少し今とはちがう時代背景を感じてくれたと思います。

―「きょだいなきょだいな」長谷川攝子作　降矢なな絵　ビッグブック　約50名（幼稚園児）とてもリズムがある本なので（「あったとさ、あったとさ、ひろいのっぱらどまんなか・・・」）途中で子どもたちもいっしょになって読める作品であった。ビッグブックだったので絵も迫力があり、子どもたちも興味津々になって食い入るように見ていた。

―「クジラのバース」村上康成　20名ずつ２回（幼稚園児）内容が感性にうったえるようなものだったので、読み聞かせよりも個人でゆっくり読むのに適した本だったかもしれません。色が多かったりして一見すると幼稚園や低学年向きの絵本に見えますが、大人向けの内容かもしれません。

絵本読み聞かせの基本は、自ら表現することである。練習のときからどんなところをどんなふうに読みたいのかを大事にしている。読んでみて子どもの反応によって、あらためて本のよさや特徴をつかむことができたようだ。

②導入の工夫や子どもの反応への応え方

―「給食番長」作・絵よしながこうた　50～60人（１～４年、特に２年が多かった）給食後の昼休みに読んだので、「今日の給食で何食べた？」と聞くと、たくさん答えを返してくれて場があったまったと思う。ストーリーにとても勢いがあったので、子どもの集中力がよかった。

―「たろうのおでかけ」村山圭子著　堀内誠一絵　１年１クラス　絵本を知っているという子どもがとても多かった。絵本に対して反応が多くて、読むことに対しては少し苦戦したものの（最初だったからかもしれないが）知っ

ていても聞いてくれるものなのだと感心しました。

―「けんかのきもち」柴田愛子著　伊藤秀男絵　10人（３年）（聞いてくれる）人数が少なく不安になりましたが、絵本を読みながらコミュニケーションをとれたので少人数もよいなと思いました。ほとんどが男の子だったので、けんかについてさまざまな発言をしてくれました。

昨年度学生の読み聞かせを聞いた校長先生が、「あとは子どもの息を感じることだ」とアドバイスをくださったことがあった。本年度学生は子どもたちの反応を敏感に感じながら読んでいた。導入や終わり方にはまだまだ工夫が必要だが、子どもたちと共に場をつくるということが体感されつつある。

③自主的な取り組みについて

―共育フェスティバル　全体の準備等に気がいき、自分のことが少しおろそかになった。いかに全員でやることが難しいか、特に大きなイベントのときには出てくる。仕事に気づけるかどうか、気づいたら他の人に協力してもらえるかどうか。やってみないとわからないことも多いので、リーダーを増やしたり、交代したりはよかったと思います。

―全体を通して　約半年の活動期間で自分自身は3回しか読めず、少し少ないと感じるが、授業、サークル、バイト等があるので実際に回数を増やすことは難しいかな？という葛藤がある。それでも一回一回経験を積むことで学ぶことが毎日あるし、キャラバン全体が上達していると実感する。

表現することの意識化と意欲の喚起が、本年度すこしずつ自分たちのものになり、自分たちで運営をしようという自覚につながったといえる。

４．今後に向けて

二年間の取り組みの概要を述べ、学びの場としての意義を考察してきた。毎週のミーティングの様子から学生が育ってきたことを感じる。蓄積の力は大きい。大学以外の場で、学生は様々な人と関わりながら学ぶことができた。学びの場が着実にひらかれていくのを感じている。特に小学校で保護者ボランティアと連携・交流できたことは、活動のモデルケースにふれることになり意義深かった。

一方で今後の課題も挙げておきたい。学生の振り返りにもみられるように、活動時間を確保し、さらに自主運営できるように教員のかかわりも含め組織の基盤をしっかりとしたものにしたい。絵本や読み聞かせそのものを学ぶ機会の提供も必要である。また、絵本の蔵書や配置に関して図書館との連携を図りたい。学校教育、社会教育の現場のニーズの掘り起こしに努め、将来的には地域からの要請に応えられる活動にしていきたい。

注

１）「人間開発学部　ガイドブック」平成23（2011）年度p2

２）髙山真琴（音楽）　夏秋英房（教育社会学）　成田信子（国語教育）　山西治男（英語）

（なりた　のぶこ・國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）